

おスギ地蔵の由来 — 絵笛峠の悲劇

今ではたびたびの道路改修で気づかなくなりましたが、堺町から絵笛へ抜ける農免道路のかたわらに、三体の地蔵を祀った地蔵堂がある。筆者が中学生だった昭和三十年代までは、この道は幾重にも曲がりくねった山中の暗い山道で、かつてこの地蔵堂はほぼ峠の頂上にあつて、絵笛村と向別村（現堺町）との村境をなしていた。

この地蔵堂が作られた理由は、遠く明治四十四年九月に遡（さかのぼ）る。絵笛に住んでいた中江千蔵の妻スギ（当時二十九歳）が、このあたりで馬車の事故を起こして亡くなったことが、この地蔵堂建立のきっかけとなったのである。

その日、朝もぎの葉物やらとうもろこし、かぼちゃを積んだスギの馬車が家を出立したのは、正午近くになってからだった。自家用の分はすでに見込みがついていたから、あまった分を浦河の市街へもって行って売ろうと考えていた。帰りには、魚やら日用品やらを少し買って、などと思いながら、スギはゴトゴトと馬車に揺られて山道をたどっていた。道とはいっても、馬車がすれちがえるかどうかという狭いものだった上、雨など降ればたちまちぬかるんで、通行不能になってしまうような道だった。晴れば晴れたで、轍（わだち）が硬く固まってガタンゴトンと、これまた通行にひどく難渋する。峠道を馬車で行くには、慣れていても充分に注意が必要だった。

九月とはいえ暑い日で、太陽は真上からジリジリとスギを照らしつけていた。あまりの暑さに、手拭いで首筋をぬぐいながらかたわらに眼をやると、いつもの用意で唐傘が一本ころがっていた。浦河へ出かけるときには、いつも雨の用心に持参して行くもので、その日の傘はおろしたての真新しいものだった。頂上を少し堺町寄りに下ったあたり、そこは斜面を削った棧道になっている所だったが、手にとった傘を勢いよく開いた途端だった。新しい傘はバリバリと乾いた音を立てて開いたが、その音に馬が驚いた。聞き慣れぬ音を耳元で聞いた馬が、突然跳びはねたかと思うと猛然と走りはじめた。ガタンゴトンとゆっくり轍をたどっていた金輪（鉄を巻いた木製の車輪）が、その拍子に轍からはずれて、馬車が大きく傾いた。最初にスギが、続いて馬車が山の斜面に投げ出された。人と馬車があとさきになりながら斜面をころげ落ちていった。

スギのこの事故は、後からここを通りかかった同じ絵笛の村人に発見された。遺体は転落による全身打撲と、馬車の下敷きになったことによる圧死だったろうといわれる。

夫千蔵は妻の死に、深く心を痛めた。元来非常に信心深い性質の人で、絵笛村に通称“大権現様”を勧請（かんじょう）したのも千蔵だったし、自宅の庭の一隅には“龍神様”があり、浦河神社から分祀した“お稲荷さん”があるくらいだったから、スギの後世を葬うのに、地蔵堂の建立を考えたのは、ごく自然ななりゆきであったに違いない。祈り良くというべきか、事故のあった場所がちょうど村境になっていることもあって、“境の神”として地蔵を祀ることは理にも適っている。

スギの長男正雄によれば大正三年頃、田中岩蔵によれば事故の二、三年後にはすでに地蔵があったという。しかし現在残されている三体の地蔵の銘文には明治四十五年五月建設の文字がある。どういう形かで、千蔵は明治四十五年に地蔵を祀ったが、現実の地蔵が出来てきたのは正雄や岩蔵のいうように数年後なのだろう。そのときには麓の森垣家などから茶菓を運んで、ささやかながら祭礼を行っ

たのかも知れない。それが大正に入ってからのことであつたと思われる。

後日譚になる。その後千蔵はますます信心深い人間になってゆき、近在の人びとの眼病を治したり、子どもの疳（かん）の虫を切ったりするようになって、地蔵の信者を増やしてゆく。そうこうしているうちに、姉ツルの稼ぎ先、浦河の奥田の家で不幸が続いた。その一人娘が結婚したもののなかなか子どもが恵まれず、何度かの流産の後ようやく娘を産んだが、産後の肥立が悪くまもなく亡くなってしまった。大正十一年のことである。

悲嘆に昏れていたツルが、荒縄で縛られた地蔵が水から上がった夢をみた。何事かを感じて、日頃信心深い千蔵に話したところ、「それはやはりお地蔵さんのお告げだろう」ということで、千蔵の建てた地蔵の隣に、もう一体地蔵を造ることになった。これに加えて、これまで地蔵参りを続けてきた人びとからも寄進があつて、さらに一体増やし、都合三体にして地蔵堂を建てるといふ大改修が行われた。このときには、地蔵そのものも造りなおしている。これが大正十二年七月のことである。

地蔵堂の中には三体の地蔵が鎮座していて、向って中央が子安地蔵、左手が延命地蔵、右手のものには何の銘も残っていない。人びとの不幸によって発願されたおスギ地蔵は、これまで道の改修のたびに四度もその場所を変えられながら、地域の人びとの尊崇を受けて細々と伝えられてきている。スギが亡くなって八十余年、世も人も変わつて、その由来を知る者は少ない。

※「おスギ地蔵」の名は筆者が便宜的につけたものであることをお断りしておく。

[文責 高田]

【話者】

中江 アサノ	浦河町絵笛	大正九年生まれ
中江 勇蔵	様似町幌満	昭和六年生まれ
中江 正雄	東京都杉並区	明治四十一年生まれ
田中 岩蔵	浦河町絵笛	明治二十九年生まれ